

めざせ、ファイナンシャル・インデペンデンス(経済的 資産運用のゴールを思

伊藤宏一、澤上篤人、

バブル経済が最高潮に達し、崩壊した1990年前後を境に、

日本経済は安定から不安定の時代に突入した。

おそらく、右肩上がりの順調な経済拡大はもう今後は望めないだろう。

では、変動の中で生きていく術は何か？ 個人が自立し、自分の理想を思い描き行動する所から、逆境がチャンスに転換し始めるというのだ。

今、どうして「自立」が必要なのか？



伊藤宏一編集主幹
(ファイナンシャルプランナー)

伊藤：お金を運用していると、それが日々増えたり減ったりと、いろいろな局面に出会うことと思います。

もちろん、お金は減るよりも増えた方がいいですが、いずれにしてもいつも意識しておく必要があるのは、「お金は自分にとって、どんな意味があるのか」ということではないでしょうか。

ヨーロッパには、「お金を自分の主人にすると、暴虐な主人になる。だからいつも、忠実な僕としておきなさい」ということわざがあります。

「何が何でもお金が増えればいい」というのでは、たとえ裕福であっても、お金に振り回される人生になりかねません。人生を幸福に生きるためのお金な

ら、自分の人生の中でのお金の意味づけや価値づけを、きちんと行っておく必要があるわけですね。

本誌では創刊時から編集方針の根幹に、「ファイナンシャル・インデペンデンス」という概念を掲げています。これは「経済的な自立」といった意味で、「より自由な生き方をするために、その道具としてお金を持とう」という考え方です。

つまり、自立して生きるためにはお金が必要であり、個人が自立して生きるからこそ、経済や社会は豊かになり、自分自身も幸福な人生が送れるのではないかということです。

そこで、創刊から20号目を迎える今号では、改めてこの「ファイナンシャル・インデペンデンス」について考えてみたいと思います。

澤上：「ファイナンシャル・インデペンデンス」では、個人の「精神的自立」と「経済的自立」という要素が不可欠で、両者が車輪の両輪のような役割を果たしています。

さて、どうしてこれらの「自立」が重要なのかというと、これは現在、およびこれからの日本社会や経済の流れととても深い関係があるからですね。

自立)!

い描ころ

岡本和久、加藤繁



従来の日本経済というのは、発展途上型の拡大路線で、右肩上がりの成長を続けてきました。

物質的な満足、つまり量的な拡大が最優先された時代で、その方向性に乗っていれば、だれもがまずまずの人生を送ることができたわけです。

「土地を持っている」「良い大学を出ている」「大企業に勤めることができた」といったように、言葉は悪いですが「うまく立ち回ることでできた」人には、**Aライン**(4ページ・図)のような輝かしい一生が待っていました。しかし、うまく立ち回れなかった人でも、結構悪くはない**Bライン**(4ページ・図)くらいの人生を送ることができたんです。

伊藤：いずれにせよ共通しているのは、自分で自立して考える必要はなくて、周囲の価値観に合わせておけばよかったということですね。

逆に「出る杭は打たれる」ではないですが、自分で考えて行動してはいけない、そんな時代でした。

岡本：ところが、バブル経済の崩壊あたりを境に、大分様子が変わってきましたね。

澤上：そうなんです。

それまでは、大企業がなくなるなんてほとんど

ど想像できませんでしたが、現在では企業合併や吸収なんて当たり前です。

最近では、昨日まで勝ち組だったエリートが、突然左遷されたり解雇されることも日常茶飯事となりました。

30代とか40代の初めて、定期昇給がストップしてしま

う大企業も少なくありません。個人個人の能力や業績次第でサラリーを決めるよ、ということです。

とにかく安定なんていうことはどこにもありえない、だれもが**Cライン**(4ページ・図)の方向にも行けば、**Dライン**(4ページ・図)の方向にも下がりえる、そんな時代です。

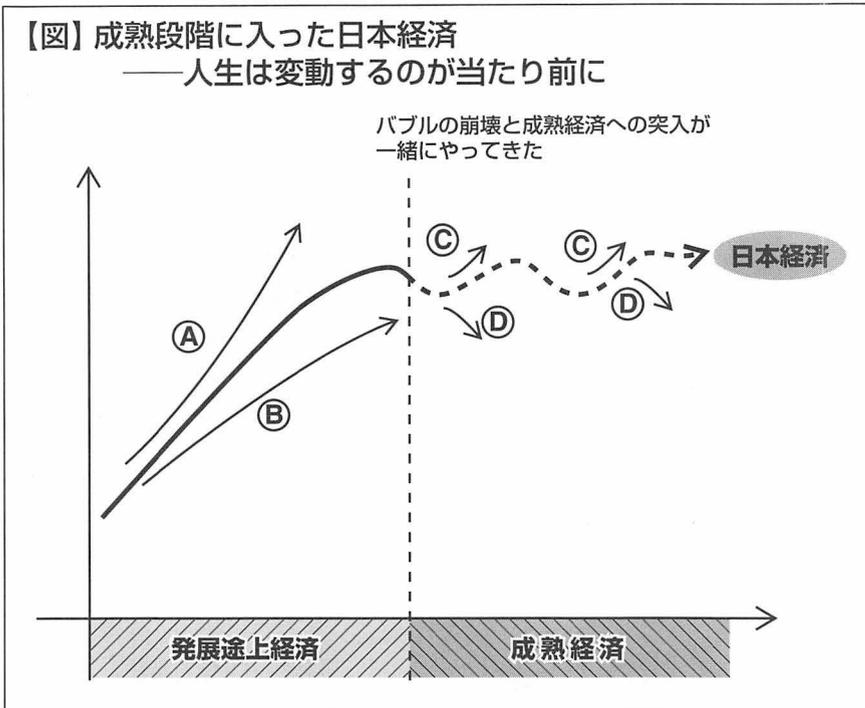
伊藤：年金や退職金がたっぷりあったり、預貯金は政府が保証してくれたり、従来は国や企業が生活を保障してくれるという格好でしたが、これからは浮かぼうと沈もうとだれも面倒は見られません。

ですからどんな人であれ、いやおうなしに自立し



澤上篤人編集委員
(ファンドマネジャー)

【図】成熟段階に入った日本経済
 ——人生は変動するのが当たり前に



て自分で考えて行動しなければならない、そんな時代を迎えているわけです。

精神的にも経済的にも自立して生きようという「ファイナンシャル・インデペンデンス」の考え方は、こうした変化の時代だからこそ必要不可欠になっています。

変動の時代を生きる術とは？

伊藤：さて、ここで今度は、「ファイナンシャル・インデペンデンス」を実現するための方法論について考えてみたいと思います。

従来のように収入が順調に伸びず、むしろ減る方向で変動する中では、「どのようにしてインデペンデンス（自立）するための資産を築いていけばよいのか？」ということが、大きな課題になります。

それについてまず必要なのは、モノを買ったりする際に、「ニーズ（必要）」と「ウォンツ（欲求）」に分けて、きちんと優先順位を考えることでしょう。

もはや収入が順調に増えることはありえないのですから、支出を合理的に節約していくことから着手しようということです。

そして第2段階目は、その節約してできたお金を運用に回し、お金に働いてもらうことによって増や

そうということです。

澤上：生活コストを見直して月々の支出を抑えることは、とても重要ですね。これは企業経営でも同じですが、コストを落とした分だけ、変動に耐えられるようになりますから。

伊藤：「うちではそんなに贅沢はしていないし、生活費を削ってまで運用に回すお金なんて、とてもありません」と言う方は多いんですが、それでもよく見直してみると、支出の中に大分不必要なものが含まれているものです。

たとえば収入の割に高価な車をローンで購入していたり、不必要なほど保険金の高額な保険に入って、毎月何万円も掛け金を支払っていたりということですね。

中でも最たるものが住宅ではないでしょうか。日本人は特に、「できるだけ都心に近い所に、しかも新品の持ち家が欲しい」という願望が強いですが、これが大分家計を圧迫する要因になっています。

たとえば、住宅を買うために3000万円のローンを組むとします。返済期間が30年で、金利は住宅金融公庫の最低金利だった2%で考えると、利息の総額は980万円です。最近は金利が上昇していますから、これが3%の場合だと、利息は1600万円くらいになります。1%金利が上がっただけで、これだけ金利負担が重くなってしまいますね。

澤上：「家賃を払うつもりでローンを払っていけば、いずれ家は自分のものになるから、財産づくりにもなって結局得だ」とはいうけれど、今、不動産価格も下落傾向にあるから、必ずしも不動産を持つことが財産づくりにはならなくなっています。

大きなローンを毎月払っている間にも、家や土地の値段が大幅に下落して、財産づくりどころではなくなってしまうことになりかねません。

それにもうひとつ、ローンという定期的でしかも大きな支出を抱えてしまうと、変動に対して対応できないんですね。

もしリストラに遭ったりして収入が大幅に減った場合でも、賃貸住宅だったら多少不便で狭くても、もっと安いところに引っ越せば済むでしょう。とこ

ろが高額な住宅ローンを抱えていると、あつという間に家計を圧迫します。

伊藤：実は年収1000万円とか2000万円といった高額所得者ほど、自己破産してしまう人が多いんですが、その原因は、住宅ローンなんですね。収入の多い人ほど高額のローンで高い住宅を買うものですが、いったん収入が途切れると、これで一気に家計が行き詰まってしまうんです。

澤上：大きな住宅ローンを抱えないというのは、気持ちの上でもとても楽です。加えて、やはり人生の時期に応じて住宅を住み替えた方が合理的でもあるんです。

結婚をして子どもを育てなければならぬ現役時代は、やはり少し広めの家が必要です。ところが、子どもたちが独立して親元を離れていったら、そんなに広い家は必要ありませんよね。

4人くらいの家族が暮らせる物件は、結構高価でローンも高額になります。ですからこの段階は賃貸でいけばいいと思うんです。

そして、子どもたちが離れていったら、運用で殖やしておいた資金の一部で、夫婦で住むためのこぢんまりした家を、日当たりの良いところにキャッシュで買えばいいわけです。

引退する頃なら通勤のことも気にせずに、環境の良いところに良い家を安く買えるはずですよ。



岡本和久編集委員
(投資顧問会社経営)

岡本：それに30年のローンを払い終える頃というのは、ちょうど住宅の傷みがひどくなる時期で、修理や建て替えのために、再び大きなお金が必要になります。マンションの場合だと建て替えの際の権利関係の調整など、さらに頭の痛いことも出てきますから、現役時代

は賃貸でいき、リタイア後に持ち家を取得するというのは、経済的にも気持ちの上でも格段に楽ですね。

日本には「世間並み」という言葉がありますが、これはどうも集団催眠の一種のような気がします。

「これは世間並みだから」と言われると、何か納得してしまうんですが(笑)、少し考えてみると別に合理的な根拠のない事ってたくさんありますよね。

「持ち家でなければ甲斐性がない」というのもそう

ですし、「隣の子が塾に行っているから、うちの子も通わせなければ」とか、「結婚式は高級ホテル、新婚旅行は豪華な海外旅行で、結婚資金は何百万円以上必要」など、いろいろとあります。

その辺を自分でよく考え、本当に必要なものと、なくてよいものに分けて組み立て直してみると、運用に回せる資金の余裕が、大分出てくると思います。

センスと、価値ある物を見る目次第で豊かにも、貧しくもなる

澤上：今までの発展途上経済というのは、経済拡大のために国民を、何が何でも大量消費をしなければならぬという方向へ駆り立てる面があったのはたしかです。大量生産、大量消費の社会を回していくためには、やはり住宅でも車でも娯楽でも、みんなでどんどん消費していく必要があったわけです。

そこで抜群の威力を発揮するのが、集団行動心理です。周囲のことを意識させては、横並びニーズを煽るわけです。でも、本当は経済なんて個々の人間の営みが集まってできているだけのことです。ですから「世間並み」なんていうことを考える必要なんてなくて、自分の価値観や満足度を追求していけばいいんです。

僕の知人にも、40代でリストラに遭った人がいます。前の勤め先の年収は1000万円だったので、「生活を維持するためには800万円がぎりぎりだ」と思って探しても、なかなか再就職先が見つからない。それで改めて奥さんや子どもと話し合っ、「塾に行くのを減らそう」とか「外食はやめよう」とか、不必要なものをどんどん切っていったら、意外に450万円でも生活できることが分かったというんです。それで450万円で探したら、あっさり再就職できたよ。

この1000万円とか800万円の中に、「世間並みに」とかいった、不要物が大分詰まっていたんですね。

加藤：それについては私も、かなり思い当たる節があるんです。よくある話ですが、バブルが崩壊する前までは大分羽振りよく商売をやっていて、外国の高級車を乗



加藤繁さん
(長期投資仲間)

り回して、食事も高級レストランと、結構派手な生活でした。

それが思わしくなくなり、いったんマイナスになってから再出発して、現在の収入は当時の20分の1くらいです。でもよく家内と、「今の方が生活の質は上がっているね」と話すんです。

車は持っていないけれど、必要な時はタクシーに乗れば済みます。家は自分で丹念に調べて探したら、掘り出し物の良い物件を安く手に入れることができました。食事も昔食べたうまい料理を再現しようと、自分で工夫して作ってみるわけですが、これもまた楽しいんです。人間関係も、昔みたいに周りからちやほやされないけれど、かえって人生の機微きびを知っている人たちと、より深く付き合えるようになっていっていると思います。

収入と幸福度というのは、どうも必ずしも比例しないということがよく理解できます。

伊藤：節約というとよく極端に走りがちで、これはあまりに行き過ぎな例ですが、「水道代がもったいなので、トイレは1日に2回しか流さない」という人がいたりします。

岡本：そんな不衛生に耐えてまでする節約は、ある意味でお金の奴隷になっているということで、ファイナンシャル・インデペンデンスとは逆ですね。

伊藤：ですから、それよりもやはり人生の目的は幸福に生きることならば、花を一輪飾るような気持ちの方が大切だと思うんです。

澤上：ファッションの世界でも、よく話題になりますよね。パリのOLのクローゼットには、東京のOLの半分か程度の量の洋服しか入っていないと。

僕自身、彼女たちの引っ越しを見たことがあるけれど、衣類なんて冬ものも全部合わせてトランク2個程度の荷物しか持っていないんです。

けれど道を行く人の服装は非常に洗練されているし、パリは世界のファッションの発信地です。

どうということかという、やはり買う時に、自分に適ったものを見分ける目を持っているということなんでしょう。中途半端や無駄なものは一切買わない。少ない服でも組み合わせたりして、上手に着回すセンスがあるんです。

生活のコストを下げようとする時に大切なのは、こうした、眼力やセンスだと思うんですね。それ次第で、生活は豊かにも貧しくもなると思うんです。

「使う」ことで経済の質が高まる

伊藤：ここからいよいよ投資運用の話に入っていきたいと思いますが、やはり投資においても、澤上さんのおっしゃるように、物事の本質的な価値を見出す目やセンスは不可欠ではないかと思います。
澤上：まったくその通りですね。本誌にも毎回、投資の方法論についていろいろと書いていますが、その根幹にあるのは、やはり美意識やセンスなんです。

というのも僕ら長期投資家が買うのは、決して「株価」ではなく、「企業そのもの」ですよ。値動きの中で値ざやを抜こうとするのではなく、その企業が社会の中でどう行動していくのかを思い描くところから投資が始まります。

それには、「社会や経済がどうなって欲しいのか」「自分はどんな世界に住みたいのか」、自分なりのイメージを持つことがうんと大事です。そんなイメージを持って自分が応援しようと投資した会社が、社会の中で受け容れられて業績も上がっていく。株価の上昇は、そのご褒美みたいなものなんですね。

またこれと関係して、これからの運用で特に大切なのは、ため込んだり、抱え込むことではなくて、お金を「手放す」、「使う」ということです。

伊藤：従来の右肩上がり経済の中での運用では、「土地を持つ」「預貯金を貯める」といったことが中心だったのとは対照的です。

澤上：右肩上がりの成長の中で、日本の経済も量的な拡大については一段落しました。ですから、単に持ったり抱え込むことに、それほど意味はなくなっているんです。でも生活の質ということでは、まだまだですよ。これからの成熟経済に生きるテーマは、「質的な拡大」です。

たとえば医療でも、現在の医療制度に疑問を持つ人は多いと思います。お医者さんの中にも、「厚生労働省の定めた現行の点数制度の中では、思ったような治療ができない」と嘆く方は少なくないでしょう。
加藤：教育もそうですね。学校が荒れていて授業が成り立たないのが普通になってきていますし、文部科学省の指導要領のレベルも下がっています。

子どもを持つ親なら、だれもが自分の子どもの教育に不安を覚えていると思います。

伊藤：それに経済大国だとはいうけれど、道幅が狭いところに電信柱が林立していて、景観も良くない上に危険だし、山や海岸はコンクリートやテトラポットで固められていて、せっかくの美しい日本の自然が損なわれてしまっています。

澤上：そんな風に、生活の質の面でいえば、まだまだやることはたくさんあります。

お金があれば医療保険の点数制度など関係なく、患者さんにとって最善と思える自由医療ができます。また教育だって、きちんとした教育を受けさせられる、プライベートスクールをつくれればいいわけです。

海岸のコンクリートも剥がしてしまっ、もっと自然に近い形の護岸工事ができるでしょう。自然の浄化力は非常に強くて、小さな貝類が繁殖できる海岸があると、海の水もとてもきれいになるそうです。

とにかくこうしたことを実現するにはお金が必要だし、またそうした方向にお金を投じることで、経済はさらに回っていくわけです。

常に、より高いレベルを意識してお金を投じることで、理想とするところの実現に向かい、なおかつお金が回っていくわけですから、どんな目線で自分はお金を投じるのか、その勉強をすることはものすごく大切です。

たしかに今までも、社会貢献的な立派な活動をしている方はいますが、自分のお金で動いている人はとても少ないです。やっぱりいざとなると、行政とかに資金を頼る場合がほとんどです。そのために、本来の目的が歪むことが少なくないですし、経済合理性からいってもムダが多かったりします。

岡本：現在の日本国内のお金の循環で、最も懸念されるのはその点ですね。公共サービスに投じられる税金や財政投融资資金が、政治的な影響で配分され、効率的に働いていません。そうしているうちに、大切な国民の資産がどんどん食いつぶされています。

もし巨額の個人金融資産が、経済合理性に基づいた付加価値を生む使い方をされたなら、日本はもっともっと豊かになるはずですよ。

ですから経済全体の質を高めるという意味でも、社会を意識した個人による、目線の高いお金の使い方は、とても重要ですね。

稼ぐよりも、使う方がむずかしい

澤上：やっぱり大切なのは、自分のお金を投入し、とことん自由に理想を追求していけることです。

そんな生き方をしている大人って格好いいですし、若い人があこがれて、どんどん続いてきますよね。

加藤：そういう視点で見たとき、対照的なのはアンドリュー・カーネギー（※注1）とハワード・ヒューズ（※注2）だと思うんです。

アンドリュー・カーネギーは米国や英国に2500もの図書館や、カーネギー・ホールのような文化施設を作りましたね。彼はそのために財産の多くを費やしましたが、それが社会の中に投じられたことによって、アメリカという国の文化を高めることに計り知れない貢献をしました。そしてもちろんのこと、この文化的な水準の高さが、アメリカの経済や国力を支える上で大きな役割を果たしています。

一方、ハワード・ヒューズは全米一という莫大な財産を残しましたが、本人は精神を病んで、孤独に世を去りました。

澤上：カーネギーも三十数歳で資本家として本格的に歩み始めた時、ずいぶん悩んだといいます。それまではガツガツと儲けることばかり考えていたけれど、その時からお金を使うことを本気で勉強し始めたというんですね。

お金を使うということは、それだけ大変なことな

（※注1）**アンドリュー・カーネギー（Andrew Carnegie 1835-1919）**：スコットランドに生まれ、少年時代にアメリカに渡る。当初は電報会社で働いていたが、鉄道会社への投資を手始めに石油への投資で資産を築く。この資産で若くして製鉄会社を設立し鉄鋼王として君臨するが、そのかたわらフィランソロピー（社会貢献）の分野でも活躍。

自治体や大学などに2500以上の図書館を寄贈するほか、カーネギーホール、カーネギーメロン大学などを設立。

（※注2）**ハワード・ヒューズ（Howard Hughes 1905-1976）**：テキサス州の裕福な機械製造会社の経営者の家庭に生まれる。父の死により若くして事業を継いだ後は、豊富な資金を元手に実業家として活躍する。映画会社を経営し、自ら監督として作品を制作する傍ら、航空会社やラスベガス一帯のホテル、空港、テレビ局、鉱山を一手に掌握するなど、その活動は多方面にわたり、全米一の富豪といわれた。

しかし、極度に細菌を恐れる脅迫神経症を患い、中年期以降はほとんど人前に姿を現さず、自家用ジェット機の中で生涯を閉じる。後継となる遺産相続人はなく、莫大な遺産のほとんどは、宇宙開発研究と医学研究に寄付されたという。

んです。お金を使う姿勢に自分のすべてが現れてしまうので、法律や社会規範といった社会一般の決まり事よりも、はるかに厳しい自己規律が必要です。

ヨーロッパなどのエスタブリッシュメントにも、個人資産をチャリティーに投じているような人は結構いますが、彼らが自らに課す自己規範は、普通の人の世界よりもはるかに厳しいものがあります。

お金は自分の「器」以上には身につかない

伊藤：以前、僕は銀行から頼まれて、1000万円以上の宝くじが当たった人のための冊子というものを作ったことがあります。

というのは、高額な宝くじに当たっても、お金の使い方を知らない人はお金に振り回されてしまって、多重債務者になるなど、破滅する人が少なくないからだというんですね。

ですからその冊子の中で強調したのは、少々突き放した言い方ですが、「あなたはお金を手に入れたけれど、あなた自身は何も変わっていません。お金の奴隷になってはいけません」ということです。

澤上：結局、お金というのは、自分の器以上には身につかないんですね。200万円くらいの元手で運用を

始めて、うまくすると600万円くらいまでは割と順調に増えるんです。でもなかなかその上にいけないんです。「あともう少しで1000万円だ」「もうちょっと殖やせば、住宅ローンが全部払える」といった欲が出てきて、運用のリズムが狂ってしまうからです。

それでも5年、10年と運用を続けているうちに、いつの間にか1000万円の運用ができるようになります。少々のことでは右往左往しない「金持ちケンカせず」という、良い意味でゲーム感覚のゆったりとした投資スタイルが身についてくるからです。

それから、また辛抱して運用を続けていると、信じられないかもしれませんが、5000万円の運用ができるようになります。この金額が1億円までいけば、もうお金持ちの仲間入りです。

ですからファイナンシャル・インDEPENDENCEをめざすなら、自分はどんな生き方をしたいのか、そのイメージを、あこがれや美意識を持って磨き込んでいくことが大切。

お金を扱える器が大きくなるほど、社会貢献したからといって、いちいち自分の名前を残そうとか考えなくなるものです。社会のために、良い意味でわがままにお金を使って、後は清々している。そんなカッコいい大人が増えてきたら、世の中がもっと豊かで面白くなると思うんですね。

『インベストライフ』からのお知らせ

本誌編集委員による、老後資金づくりの本格的指南書 『自分の年金は自分でつくる！』好評発売中！

『インベストライフ』編集・執筆陣による単行本『自分の年金は自分でつくる！』が実業之日本社より刊行されました。

ライフプランから投資運用の実際まで、資産づくりの方法論をわかりやすく解説しています。個人の資産運用はもちろん、FPのコンサルティングの際などにも役立つ一冊です。

全国書店、ならびにインターネットのオンライン書店などで購入できます(定価1575円・消費税込み)。

【目次】

- 第1章 「これからの老後資金は『攻め』と『守り』で考える」(執筆：伊藤宏一)
- 第2章 「そもそも年金って何？これからどう用意していこうか」(執筆：平山賢一)
- 第3章 「DIY年金運用の実際 手づくり年金運用はプラン(計画)、ドゥー(実行)、チェック(確認)のサイクルで」(執筆：岡本和久)
- 第4章 「個人投資家の利点を最大限に利用しよう」(執筆：真壁昭夫)
- 第5章 「長期運用を貫くための『投資の心理学』」(執筆：真壁昭夫)
- 第6章 「経済と長期運用と年金づくりと」(執筆：澤上篤人)



伊藤宏一、平山賢一、岡本和久、真壁昭夫、澤上篤人共著

(実業之日本社刊)